

青少年くらし

家庭版

発行
倉敷市教育委員会
編集
生涯学習課
☎ 426-3845

12月



「水島こども食堂ミソラ♪」

今回は前回に引き続き「水島こども食堂ミソラ♪」の運営をされている井上正貴さんからのお話の続編です。二〇二〇年十二月から、水島北春日町に常設の居場所「ハルハウス」を開設しており、子ども食堂のみならず、フードシェアやフードパントリー（地域の共有食糧庫）などの活動もされています。

こども食堂に通っていた子が、何年後かにやって来た時に、「おっちゃんやおばちゃんがつけてくれたご飯がおいしくて、それでいつも来ていたんだ。」と言ってくれるだけではないと思っています。この思いは多分叶うのではないかと思います。この思いは多分叶うのではないかと思います。根っここの部分は人間臭くて泥臭いものなのです。ご飯を食べるのは人の営みだと思います。豆ごはんを初めて食べたという子どもが事実いるのです。この辺りでいうアラスカご飯をスタッフが用意して持って来ると、初めての子は恐る恐る食べます。食べている時の子のつづらな瞳が輝いていました。「おいしい、おいしい。」と言い、おかわりを三回も



四回もするのです。こういった貴重な体験は、多分ずっと記憶に残ると思います。ご飯を食べるということは、動物的なことであり、根源的なことなのです。そして、人間はずっとそれを繰り返してきました。太古の時代、狩猟や農耕を行っていた時代から、人が生きるためのもので、体に染みついて離れない、生きるために必要なことなのです。そこにアクセスしてやっているのです。イメージでは、実はみんな個々に生活して、個々に家を持っているのですが、どこか旅をしながらさまよっていて、そこがたまたま「水島こども食堂ミソラ♪」に明かりが点いていて、そこに入った時に、「ご飯あるよ。味噌汁あるよ。」って、声をかけられて

心の中で迷っていた人たちが、ここなら安心できるなど感じられる、いわば「旅の宿」のようなところになったらいいなと思っています。



ここの運営はすべて寄付でまかなわれています。市からの補助金など一度も申請したことはありません。毎月一度のこども食堂の開催をするくらいにの寄付は集めました。主に個人からの支援が多かったです。月に二度、三度と行うとなれば当然資金が必要になってきます。また、新しい智慧をいただくために、プロのような方に来てもらうには謝金も必要です。食事以外の新たなプログラム、新しい企画、心が豊かになるようなこと、例えば物を作ったり、臨鉄に乗ってアリオの公園に出かけたりもしたいです。大人は大きな施設へ連れて行けば喜ぶと勝手に思っているのですが、子どもはちよつとしたところもしかり見えています。それを考えた時、資金が必要になってきます。普段お出かけができない子はそれで十分なのです。遠出をしなくても、ちよつとしたお弁当を作ってもらって出かけると、元気が出るのです。ただならただで、安くならなくて、その楽しさを味わう方法を親が習っていないこともあり、考えることすらうつつしく思ってしまうのです。そうやってしまつと、親が投げやりになったり、自暴自棄に陥ったりしてしまします。その手前で受け止めてもらえる場があったり、親と子どものための居場所があったりすると救われます。その時、親は親子は子で分けて、リフレッシュできる場があればいいのです。全部自分の家族の中だけでというのは無理があります。自分の家族ということを一旦横に置いて、自分の住んでいる地域以外の地域の人と



「クリスマスタペストリー」 布タペストリー

倉敷市立倉敷支援学校 高等部2年 共同制作（令和2年度）
季節の掲示物制作をとおし豊かな心を育てたいです。個性が引き出せるよう形の異なるスクイーズに色つけデコレーションをしました。

関わることで、大人のリフレッシュで
きる場所があればよいのではないで
しょうか。

「水島こども食堂ミソラ」では、
お昼にご飯を食べ終わると、大体一時
くらいから子どもは外に遊びに行きま
す。するとある男性ボランティアは、
女性陣やスタッフ用にケーキを手作り
して持って来ます。コ

ーヒーを淹れるのが得
意な人、スイーツを作
るのが得意な人、子ど

もの面倒をみるのが得意な人などいろ
いろなタイプの人が出て、自然とすみ
わけができています。それで上手く収
まっています。

よく似た光景でいうと、村の葬式や
法事を連想します。子どもからお年寄
りまで一堂に会し、みんなわいわいが
やがや。そこには自然と分担ができ、
いろいろな会話がでるのです。式を
仕切る長がいて、お年寄りが一杯飲ん
で、女性たちは奥で何やら喋っていて、
子どもは訳が分かっ
ていないせいもあっ
て元気に遊んでいる。
町内や身内でいろい
ろあるかもしれない



けれど、その時はみんなで故人を思い、
昔話を語るような雰囲気は、古き良き
ものだと思います。

今はコロナで会食ができなくて、食

糧を渡すことがメインになっていま
すが、ひと言ふた言「元気だった」とか

「久しぶり」とか挨拶をして、短い会
話を交わしています。そこでいろいろ

思索した結果、本当に困っている人に
は食べ物や車を乗せて届けようという

ことになりました。「フードシェアカー」
です。これを始めたのは倉敷では最初

だったと思われるのですが、この活動
をSNSにアップし続けているうちに、

いろいろな方から、「家にある米を使っ
て」とか、「うちの野菜も持って行っ

ていいよ」「うちの絵本、届けてあげ
て。」などの反響がありました。また、

見知らぬ人から電話がかかってきて、
「実は、旦那の仕事が減って困ってい

る。」とか、社会福祉協議会から電話
がかかってきて、どこそここの家に物資

を届けてもらえないかという依頼もあ
りました。その話を聞

くと断れませんでした。
なぜなら、食べる物が

なかったら死んでしま
うからです。



十年前、二十年前には叶わなかった
ことが今ではでき
るようになりまし

た。今はパソコン
がありスマホがあ

りインターネット
があります。こう

いったツールをうま
く駆使していけば、できないこともで

きるようになってきました。後は、資
金提供者や仕組みをよく理解している

人がサポーターに就いてもらうことで、
同じ志を持っている人に、同じ旗のも

とに集まっていけることです。国とか行
政とかをどうこういうのではなく、自

分たちの生き方として、それはやらな
いといけないと思うのです。

種をまかないと何も育ちません。入
り口として、「子どもの居場所づくり」

や「こども食堂」が全国に三千余り
できています。ただし、これは終点では

なく、取っ掛かりに過ぎないのです。
こういった場所でのふれあいや笑顔は

誰もが心をくすぐられます。ただ、こ
ういったものが必要な社会は、逆にブ

ラックな面があるのだということを、
認識しておかなければならないことな

のです。このことを多くの人に伝える
ことで、仲間も増え、理解者も出現し



てくるに違いありません。知ってもら
わないことには、何も始まらないので
す。こども食堂から次のステップに進
むために、行政や他の団体との連携を
図っていかなければならないと考えて
います。ただ、行政のひも付きになっ
て、制度化されると市民は引いてしま
います。もがきながら、悩みながらも
この子たち、この人たちのために何が
必要なのか、何をすれば良いのかを今
後も探し続けていこうと思っています。
コロナ禍の影響を受け、みんながス
トレスを抱えています。小さな居場所
「ハルハウス」に一度立ち寄ってみて
ください。
(おわり)

【倉敷市健康づくり課からのお知らせ】

野菜が入った料理、お家でも給食でも残さず食べているかな？
倉敷市では、野菜を食べる3つの習慣を身につけて健康になろう
という「くらしき3ページプロジェクト」をすすめています。ぜひ、お家
の人やお友達と3ページしてね！

●食育ポータル
HPはこちら→



●健康づくり課
Instagramは
こちら→

